

## ヘンリー・ダイアー記念図書

滝沢 正順（機械系図書室）

図書館の寄贈本や寄付金等による蔵書には、寄付者名等が表示されていることがあります。機械系図書室でも、寄贈された単行本には原則として現在そのようにしています。

書庫の中の本を、業務上さまざまな必要から開くことがあります。保存書庫の中の第二次世界大戦終了以前の受け入れ本の中には、現在では東京大学として使わなくなったデザインの書票などによって、寄付者名等が表示されているものあって興味深く感じられます。

そうした過去の受け入れ本の中には、目立たない箇所に「著者寄贈」「出版社寄贈」と小さいスタンプが押しただけのものもありますし、鉛筆の走り書きで「何々先生から」と、すでに亡くなられた教官の名が記されたものもあります。寄贈本でも本自体に寄贈者名の表示のない本もきつと多くあると思われます。

中には、本の見返しいっぱい近い大きさの用紙に、名前や寄贈経緯を記して貼付された目立つ表示のものもあります。

たとえば3人の卒業生が共同で寄贈した本で、3人の名前と顔写真、それに勤務会社名が見返しいっぱい近い大きさの用紙に印刷されたもの。

また30歳くらいで夭折した卒業生を追悼するために関係者が寄贈し、故人の名前、顔写真、性行等を印刷して見返しいっぱい近い大きさの用紙に貼付したもの。

どちらも複数の本がありますが、おそらく機械系図書室以外でも所蔵していると思われます。しかしどちらも全体としてどのくらいの量の本が寄贈されたかは、寄贈リストでも見つけないと、わからないかもしれません。

そうした見返しいっぱい近い大きさの目立つ用紙の表示の寄贈本のひとつに、ヘンリー・ダイアーを記念した本（「ダイエル博士記念図書」）があります。

ヘンリー・ダイアー Henry Dyer (1848-1918) は、明治前期における東京大学工学部・工学系研究科の二つの前身校のうちのひとつ、工部大学の都検（のちに教頭と改称）だった英国人です。都検・教頭は、工部大学の英文刊行物ではprincipalと表記されています。

このヘンリー・ダイアーについては、その生涯をあつづけた三好信浩著『ダイアーの日本』が1989年に福村出版から刊行され、また、ダイアーの著書のひとつ『Dai Nippon ; the Britain of the East』の日本語訳『大日本』が1999年に平野勇夫訳で実業之日本社から出版されています。

東大工学部・工学系研究科主催による東京大学ダイアー記念シンポジウムも1997年3月に開催され、1998年には英国大使館から東大に新作のダイアーの胸像が贈呈されたことが、どちらも『工学部ニュース』に紹介されています（97年4月号、98年9月号）。

この文では、たんに「ダイアー」でなく、「ダイアー先生」と記さないといけないのかもしれませんが、歴史的な方ですので敬称を略して記させていただきます。ご了解をお願い申し上げます。

さてダイアーを記念した寄贈本（「ダイエル博士記念図書」）のことですが、『東京大学史紀要』第20号（2002年3月）巻頭に「東京大学所蔵「ヘンリー・ダイアー関係図書」をめぐる考察」という論文が載っています。この論文の半分は、「ダイエル博士記念図書」についての紹介と考察が記されていて、おそらくこの記念図書の詳細について、はじめて広く知られることになったと思われます。

ヘンリー・ダイアーは学課の教官としては機械と土木を教えたため、「機械系図書室にダイアーについての資料は残されていないか」と、研究者の方から何回かきかれたことがあります。まったくありません。機械系図書室だけでなく、工学部・工学系研究科の図書室にはダイアーについての資料は、（工部大学校時代から伝来・残存したものは）ほとんどないようです。

機械系図書室のばあい、ダイアーに関しての資料という点、例外的にあったのが「ダイエル博士記念図書」です。もともとこの記念図書は、工部大学校卒業生等がダイアーを記念するために、大正15年に当時の工学部の各学科に寄贈した本のようなので、工部大学校の都検としてのダイアーを研究する直接の資料とはなりません。

見返しいっぱい近い大きさの用紙に印刷された寄贈の表示は、寄贈者や追悼する故人を末永く記憶にとどめたいために目立つ表示にしてあるのでしょうか、「ダイエル博士記念図書」のばあいも、「工科ニ必要ナル図書ヲ購ヒ之ヲ大学ニ献ジ工学啓発ノ資ニ供」することとあわせて、「日本ニ於ケル工学ノ開祖トシテ（ダイエル）先生ノ偉績ヲ永ク後生ニ伝ヘントス」るための寄贈であると記されています。

しかし大正15年に各学科に寄贈された「ダイエル博士記念図書」は、現在その各学科の図書室で寄贈されたすべてを見つけることができないと、上記論文に記されています。

機械系図書室のばあいもすべては見つけられません。見つからない本については、たとえば、昭和17年に千葉に第二工学部が新設されたさいに本郷の（第一）工学部から分けられた本なのかもしれない、なども考えられます。もしそうなら第二工学部の後身の生産技術研究所の図書室に所蔵されているかもしれない、なども思われます。もしそうだとその確認作業はかなり大変と思われ。もちろん他の理由で見つからないのかもしれませんが。しかしいずれにしろ、見つからない経緯の確認はもし可能ならそれはそれでなかなか興味深いことのように個人的には思われます。